

「仮面の女神」特徴紹介

縄文ゼミナール 小池館長が講演

尖石縄文考古館

茅野市尖石縄文考古館は29日、「縄文ゼミナール」

を同館で開いた。同館の小池岳史館長が「仮面の女神」と縄文をいかしたまちづくり」と題して講演。約50人が聴講し、同市で出土した国宝土偶「仮面の女神」の特徴や市が進める「縄文プロジェクト」に理解を深めた。（宮沢知史）

「仮面の女神」の国宝指定10周年を記念して昨年11月に2回開いたゼミナールの追加開催。今年1月に、小池館長が青森県の八戸市是川縄文館



で行った講演の内容を地域住民にも聞いてもらおうと企画した。

茅野市の中ツ原遺跡で出土

した仮面の女神は、大形・完形で優れた造形が特徴で、墓と考えられる穴に埋納された状態で出土した数少ない土偶。右足が壊れた状態で出土し、土偶内部に破片を入れて他の破片で割れ口をふさいでいたことなどから、墓穴に入れる前にわざと右足を壊したと考えられるという。

「環境の悪化で縄文

↑
国宝土偶「仮面の女神」や縄文プロジェクトに理解を深めた縄文ゼミナール

時代の人々の暮らしが続かなくなり、祈る道具として仮面の女神が作られたのでは」と小池館長。「壊れた右足と破片を全て墓に入れたのは、死者のよみがえりと自然環境の回復への願いが込められているのではないか」と話した。

茅野市の縄文をいかしたまちづくり「縄文プロジェクト」

ト」についても紹介。2022年からの第2ステージでは、「ひとづくりはまちづくり」を合言葉に「市民総学芸員」化に注力して取り組んでいると説明した。